

川口遊里図屏風 10 曲 1 隻

川口遊里図屏風

かわぐちゆうりずびようぶ

分野／部門

有形文化財／美術工芸品〔絵画〕

所有者

大阪市

所在地

大阪府中央区大手前 4 大阪歴史博物館

紹介



江戸時代前期に木津川河口の港、三軒屋にあった遊里の賑わいを描いた屏風。10 曲という絵巻を思わせる横長の画面いっぱいに奔放に遊里の情景を展開し、服飾、建築、船舶、漁労、食事、商いなど、当時の人々の暮らしを知る上で貴重な情報が画面に豊富に盛り込まれている。

三軒屋の遊里は、明暦 3 年(1657)に新町ができたときに、そこに統合されているので、本図はそれ以前の様子を描いたものだろう。人物の髪形や服装、絵画史上の様式でも江戸時代前期の特徴を明瞭に示している。遊女と客の悲喜こもごもの人間模様をおおらかに描き、明るい雰囲気画面を支配している点は特筆される。近世という新しい時代の活力を読み取ることができる。

川に面した遊里の板場では、襖一つ隔てた揚屋への仕出しの準備に余念がない料理人の様子などが克明に描かれており、現代の”食いだおれ大阪”に通じる活気が画面にあふれている。魚介や鳥、野菜など、豊富な食材が用いられ、俎板上で包丁を動かす者、うちわで炭火を加減する者、大根の皮をむく者など、料理人たちの姿が生き生きと表現されている。これまでも風俗画の名品として知られ、食文化の歴史を考える際にしばしば取り上げられてきた。

画面の向って左側は河口で、西国諸藩の旗印を掲げた御用船が藩からの年貢米を積んで大阪の蔵屋敷を目指す様子なども描かれている。画面を横断するように川面を埋め尽くす大小の船の往来は、”出船千艘、入船千艘”といわれた水都大阪の活況を如実に伝えるビジュアル資料としても大いに注目される。

江戸時代前期の大阪の風俗画はその遺例が極めて少ない。特に本図は美術作品としての完成度も高く、貴重な作品である。

参考文献

『近世風俗図譜 第6巻 遊里』(小学館 1982年)

松浦清「三軒屋の賑わいを描く―川口遊里図屏風―」(『大阪の歴史と文化財』7 2001年)